

10/4/09 「この世は我が主にあらず」ルカ14:1-7

福音書は主イエスが幾度も律法学者と呼ばれるユダヤ教の指導者と論争する場面を記しています。今日読んでいただいた安息日の解釈を巡ってなされた論争はその一つです。この論争の背景を探ってみましょう。

安息日は一週の中の日を、耕作等のすべての労働から身を引き、静かに神の恵みに思いを馳せ、感謝するために設けられたものでした。しかし安息日の精神は段々と形骸化し、主イエスの時代には何もしていないということだけが重要視されるようになっていたようです。

律法学者達は、安息日であろうがなかろうが、汗水たらして働かなければ生きていけない人々を、安息日を守らないダメな輩として軽蔑したのです。このような宗教的、社会的事情を背景に主イエスと律法学者達との間の安息日論争は巻き起こったのです。

主イエスの前に水腫を患った人が現れます。一人の律法学者が主イエスを試そうとして意地悪な質問をします。「安息日に病気を治すことは、律法で許されているのでしょうか。」

律法学者にとって人間の価値は律法を守るかどうかにかありました。主イエスはこのような考えや社会的風潮を徹底的に否定されました。この水腫を患った人は神の無限なる愛に包まれていると言うのです。重要なのは律法ではなく、神がこの人を徹頭徹尾愛して止まないということです。

だから苦しんでいる人を前にしながら、安息日には祈りの他には何もしてはならないというのは悪なのです。水腫の人を癒すこと、それが善なのです。

律法学者は、血の通った人間を無視する社会的風潮に知らず知らずのうちに染まってしまったのです。当時の社会の風潮が人間への優しさの眼差しを封じてしまったのです。ここに律法学者の悲劇がありました。

クリスチャンも往々にして律法学者と同じような態度を取ることがあります。主イエスの愛と社会的風潮がかちあう場合、主イエスの愛を捨て、社会的風潮を選ぶことは歴史が示す事実です。

エイズの病気が世界を駆け巡った時、エイズは社会的道徳をわきまえない者がかかる病気だとして、彼らに対する援助に断固反対したクリスチャンが大勢いました。

現在キリスト教徒の中には、イスラム教の聖典であるコーランを1ページも読まずにおいて、イスラム教を悪魔の宗教と断じ、イスラム教徒全体を疑いの目で見るとする傾向が後を絶ちません。

以上の例から分かるように、我々クリスチャンもまた、ことあるごとに 社会的風潮の前に腰を折り、膝をかかめる偶像崇拜に陥ってしまうのです。

「この世は我が主にあらず」なのです。キリストこそ我らの主なのです。

私たちに律法学者の陥った社会的風潮への埋没という落とし穴を避ける道はあるのでしょうか。その道は確かにあります。

その道とは主イエスが示された愛こそ、人間の人間らしさの基盤であるという確信に常に磨きをかけること、これであるに違いありません。そうすることによってのみ、私たちは社会の流れに抗してイエスに従う者として歩むことができるのです。

私達が与る聖餐式は、そのことにあらためて思いを馳せ、深く心に刻む時です。特に今日は、世界中のクリスチャンが、アメリカで、アジアで、アフリカで、ヨーロッパで、中近東で聖餐式を守っています。私達の信仰の同志は、世界中に存在するのです。彼等と共に明日からの一週間を、人間らしく、生き生きと、正々堂々と生きていこうではありませんか。